

史跡旧二条離宮（二条城）

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡旧二条離宮（二条城）

2010年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、防災・防犯整備工事に伴う史跡旧二条離宮（二条城）の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

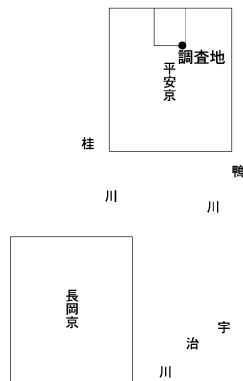
平成 22 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 史跡旧二条離宮（二条城）・平安京跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区二条通堀川西入二条城町 541 番地 二条城 |
| 3 委 託 者 | 京都市 代表者 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 2010 年 9 月 6 日～ 2010 年 9 月 17 日 |
| 5 調査面積 | 8.4 m ² |
| 6 調査担当者 | モンペティ恭代 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「聚楽廻」・「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | モンペティ恭代 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |



目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	4
(1) 遺跡の位置と環境	4
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	6
(1) 遺構の概要	6
(2) 1 区の調査	6
(3) 2 区の調査	7
(4) 3 区の調査	8
4. 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) 瓦類	10
(4) その他の遺物	14
5. ま と め	14

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	1 区路面全景（北東から）
		2	1 区最終面全景（東から）
図版 2	遺 構	1	2 区最終面全景（北から）
		2	3 区最終面全景（北から）
図版 3	遺 物		出土瓦

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	1 区調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 3	2 区調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 4	3 区調査区配置図 (1 : 1,000)	3
図 5	1 区調査前全景 (南東から)	4
図 6	1 区作業状況	4
図 7	2 区調査前全景 (北東から)	4
図 8	2 区作業状況	4
図 9	3 区調査前全景 (北から)	4
図 10	3 区作業状況	4
図 11	1 区遺構実測図 (1 : 40)	7
図 12	2 区遺構実測図 (1 : 40)	8
図 13	3 区遺構実測図 (1 : 40)	9
図 14	菊丸瓦・軒丸瓦拓影・実測図 (1 : 4)	11
図 15	軒平瓦拓影・実測図 (1 : 4)	13
図 16	輪違瓦拓影・実測図 (1 : 4)	13
図 17	漆喰塊	14

表 目 次

表 1	遺構概要表	6
表 2	遺物概要表	10

史跡旧二条離宮（二条城）

1. 調査経過

今回の調査は、京都市中京区二条通堀川西入二条城町 541 番地に所在する史跡旧二条離宮（以下「二条城」という）における、防災・防犯設備工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査である（図1）。二条城は城内全域が史跡に、二の丸御殿庭園が特別名勝に指定されており、また、北西部は平安宮、南西部は神泉苑などの遺跡が重複している。これまでに城内で実施した遺跡調査では、弥生時代から江戸時代に至る遺構を検出し、縄文時代から江戸時代の遺物が出土していることから、今回も各時代の遺構を検出するとともに、遺物が出土することが予測された。

このため、文化庁および京都府ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）と元離宮二条城事務所が協議を行い、元離宮二条城の防災・防犯設備工事に係る協議会の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、埋蔵文化財発掘調査を実施した。

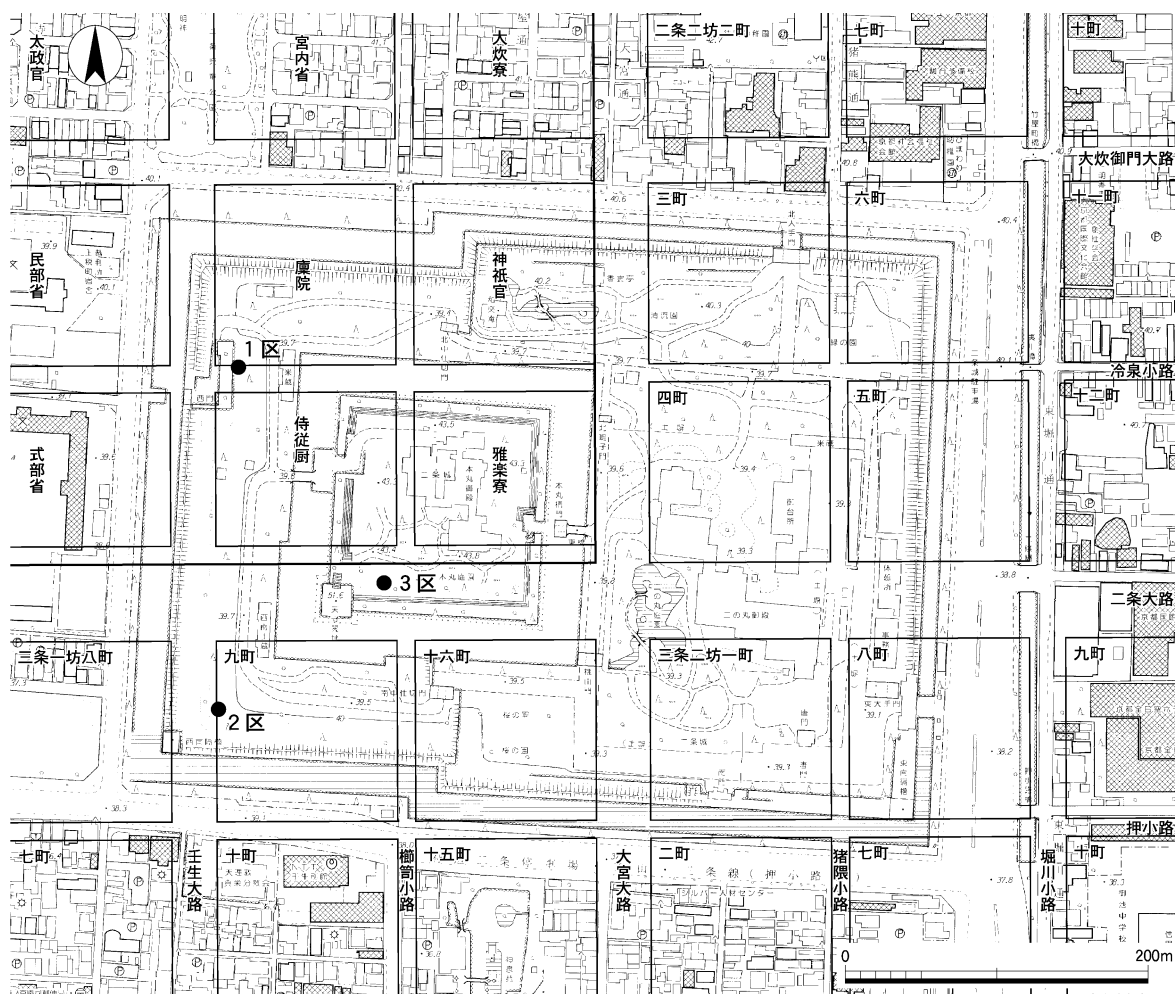


図1 調査位置図（1：5,000）

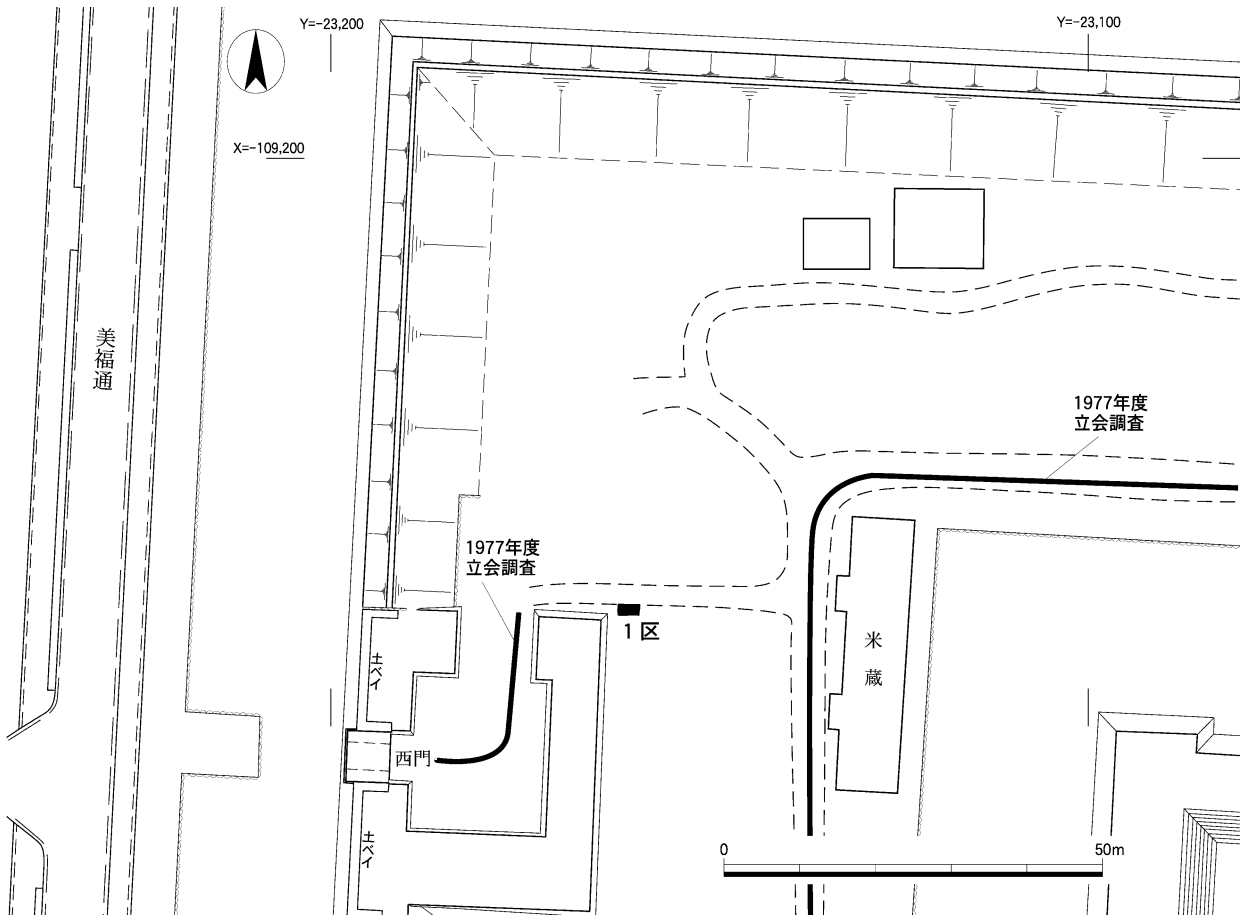


図2 1区調査区配置図 (1 : 1,000)

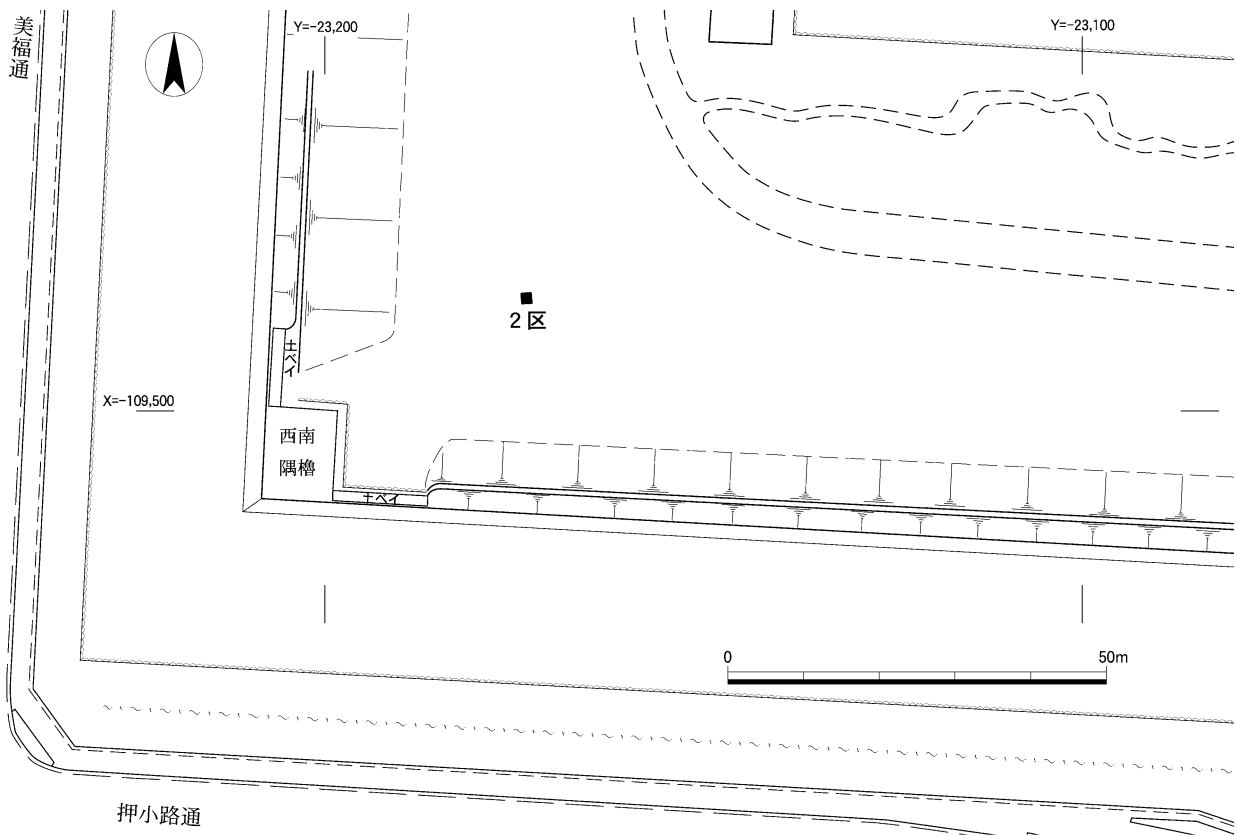


図3 2区調査区配置図 (1 : 1,000)

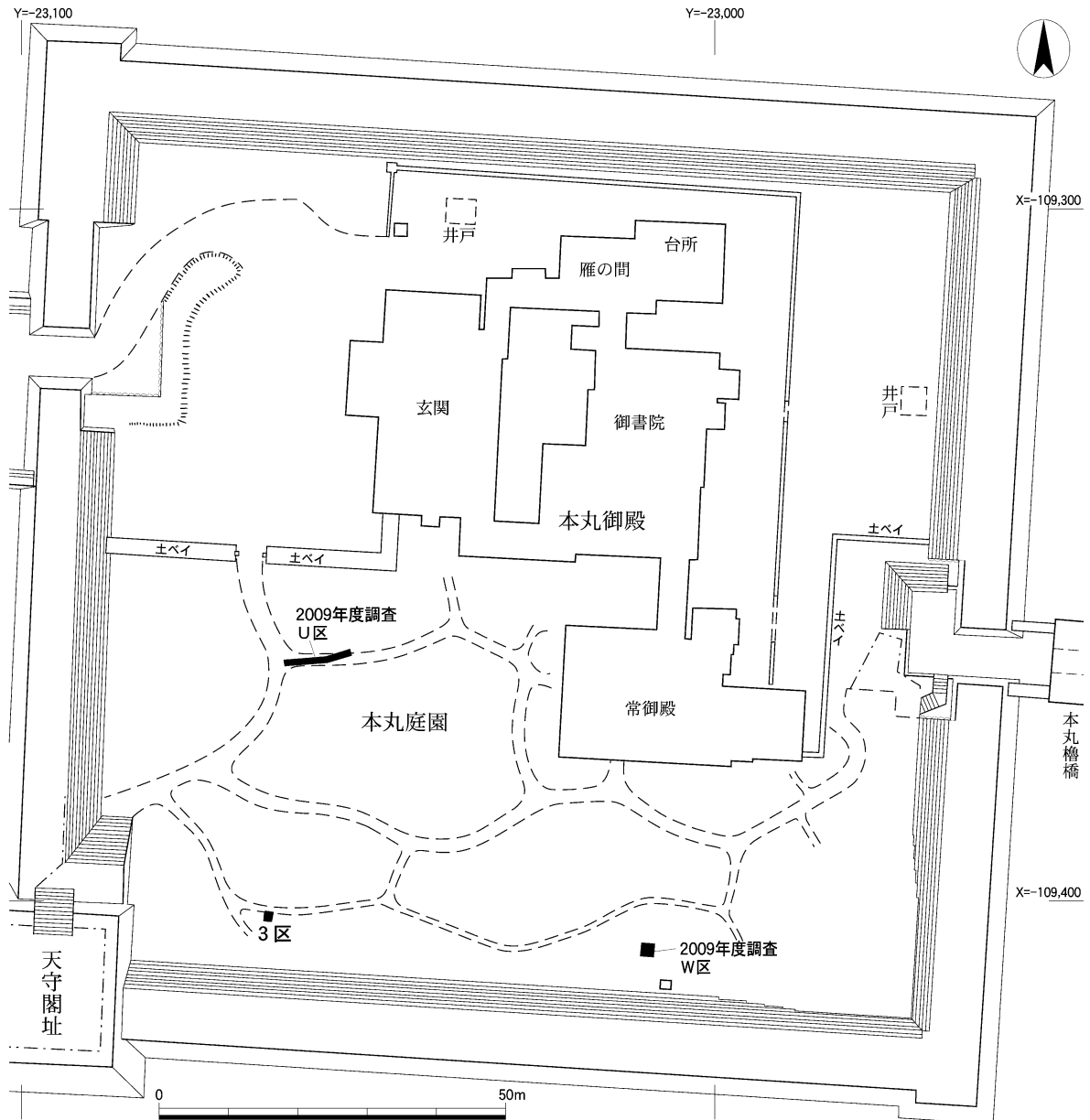


図4 3区調査区配置図(1:1,000)

調査では、新規に施設工事が行われる3箇所(城内西門北東部、城内南西部、本丸庭園南部)に調査区を設定し、それぞれ1区(図2)、2区(図3)、3区(図4)として調査を行った。各調査区では調査中に、適宜、文化財保護課の指導を受けて調査区の部分的拡張を行った。最終的な調査面積は合計8.4㎡である。

調査は、幕末期以降の堆積土を1区・2区では機械掘削、3区では人力で掘削し、工事掘削予定深度の地表下1mまで調査を進めた。また、工事掘削が1mでとどまることから、文化財保護課の指導により、それ以下の調査は実施しない事となった。各遺構面では写真・図面の記録を作成し、遺物を採集した。掘削土は、各調査区近接地に仮置きした。1区から開始し、2区・3区へと順次移行していき、2010年9月17日にすべての作業を終了した。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境

調査地は二条城城内に位置し、『京都市遺跡地図』¹⁾では史跡旧二条離宮（二条城）および平安宮廩院（1区）、二条大路（3区）、平安京左京三条一坊九町（2区）にあたる。また、平安京左京三条一坊九町は平安京遷都に伴って造営された神泉苑の敷地にあたる。

二条城は徳川家康により慶長7年（1602）から造営が開始され、翌年に完成した。その頃は現



図5 1区調査前全景（南東から）



図6 1区作業状況



図7 2区調査前全景（北東から）



図8 2区作業状況



図9 3区調査前全景（北から）



図10 3区作業状況

在の二の丸御殿の位置を中心とする方形で、城内北西部に天守が聳え、堀川通に面して大手門が開いていた。寛永元年（1624）からは後水尾天皇の行幸に備えて、徳川秀忠・家光により西側への拡張、本丸や殿舎の造営など大規模な改修が開始され、現在のような二重の濠と石垣をもつ城として整備された。後水尾天皇の二条城行幸は寛永3年（1626）に行われた。その後、寛延3年（1750）には落雷で天守が焼失、さらに天明8年（1788）の大火では本丸御殿などの城内の建物の多くが焼失し、徐々に衰退していったようである。しかし、幕末には再び政治の舞台となり、文久3年（1863）の徳川家茂の入城から慶應3年（1867）の徳川慶喜による大政奉還の表明までの期間には再整備が行われ、本丸には仮御殿が建設され城内各所に番小屋が建ち並んだ。

今回の調査地は、寛永期に後水尾天皇の二条城行幸に合わせて西側へ拡張された本丸にあたる。1区は西門を取り囲むように築かれた石垣の北東に位置する。寛永造営時の二条城の御殿の配置を示す絵図²⁾によると、この石垣は北に開き、門が設けられている。周辺には番所が2箇所描かれている。西門は石垣を開けた埋門形式で、外堀には木製橋がかかっていた。往時は通常の出入口にはこの西門が使われていたという。2区は南西隅櫓北東に位置する。同絵図によるとこのあたりには番衆小屋や組頭小屋が建ち並んでいる。3区は本丸内天守閣址北東に位置する。本丸は周囲を内堀と石垣に囲まれた約90間四方の区域で西と東に出入り口がある。同絵図によると東櫓門から入って玄関があり、ここから西へ順に遠侍、広間、書院、御殿と並ぶ。後水尾天皇の行幸時には、秀忠がここを宿所とした。寛永11年（1634）の家光上洛以降は上述のように、天守閣や御殿を失ったが、幕末には仮御殿が建設され、明治27年（1894）に桂宮家今出川屋敷が本丸に移築され現在に至っている。

（2）周辺の調査

二条城城内ではこれまでも遺跡調査が行われており、今回の調査は当研究所が実施する16次調査となる。

周辺の調査については、『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-15』に要領よくまとめられているので、繰り返さない³⁾。ここでは、今回の調査区1区および3区に近接する調査成果に触れておく。なお、2区の近接ではこれまで発掘調査は行われていない。

まず、1区に近接する調査には、昭和52年（1977）に照明灯設置工事に伴う立会調査⁴⁾がある。この調査では現地表下0.5mまで現代積土層、積土層下には厚さ0.5mの江戸時代の遺物包含層を検出、現地表下1.4～1.5mまで掘削した箇所では平安時代後期の遺物包含層を検出し、平安時代の土器類・瓦、室町時代の土器類、江戸時代の陶磁器類・瓦が出土している。

3区に近接する調査には、平成21年（2009）に防災・防犯設備工事に先立つ埋蔵文化財確認調査⁵⁾がある。この調査では、U区で、約5～15cmの厚さの表土・盛土、その下層に約10～15cmの厚さの江戸時代後期の包含層、その下層に約10cmの厚さの江戸時代前期の整地層、その下層に20cm以上の厚さで江戸時代前期の盛土を検出し、焼瓦を含む江戸時代の前期から中期の遺物が出土している。またW区では、約20～30cmの表土・盛土の下層に約10cmの厚さの江戸時代後

期の包含層である焼土を含む褐色砂泥、その下層に 50 cm以上の厚さで江戸時代前期の盛土であるにぶい黄橙色砂礫・黄褐色砂礫層を検出している。土坑 66 より多量の焼瓦を含む江戸時代前期から中期にかけての遺物が出土している。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

調査地の土層の層位は、3箇所調査区でそれぞれ状況が異なる。ただし、文化財保護課からの指導により、工事予定深度となる 1 m以下の掘り下げは遺構の保存を考慮して行っていない。以下、地区ごとに層序と遺構を概説する。

(2) 1 区の調査 (図 11)

概要

1 区は防犯カメラ配線のためのハンドホール設置予定箇所の調査区である。南北 1.5 m・東西 1.5 mの方形で設定したが、第 1 面調査中に遺構を保護することとなったため、東側へ約 1.3 m拡張した。

調査は 2 面に分けて実施し、第 1 面で江戸時代中期から幕末の路面、第 2 面で江戸時代前期の整地層を確認した。

層位

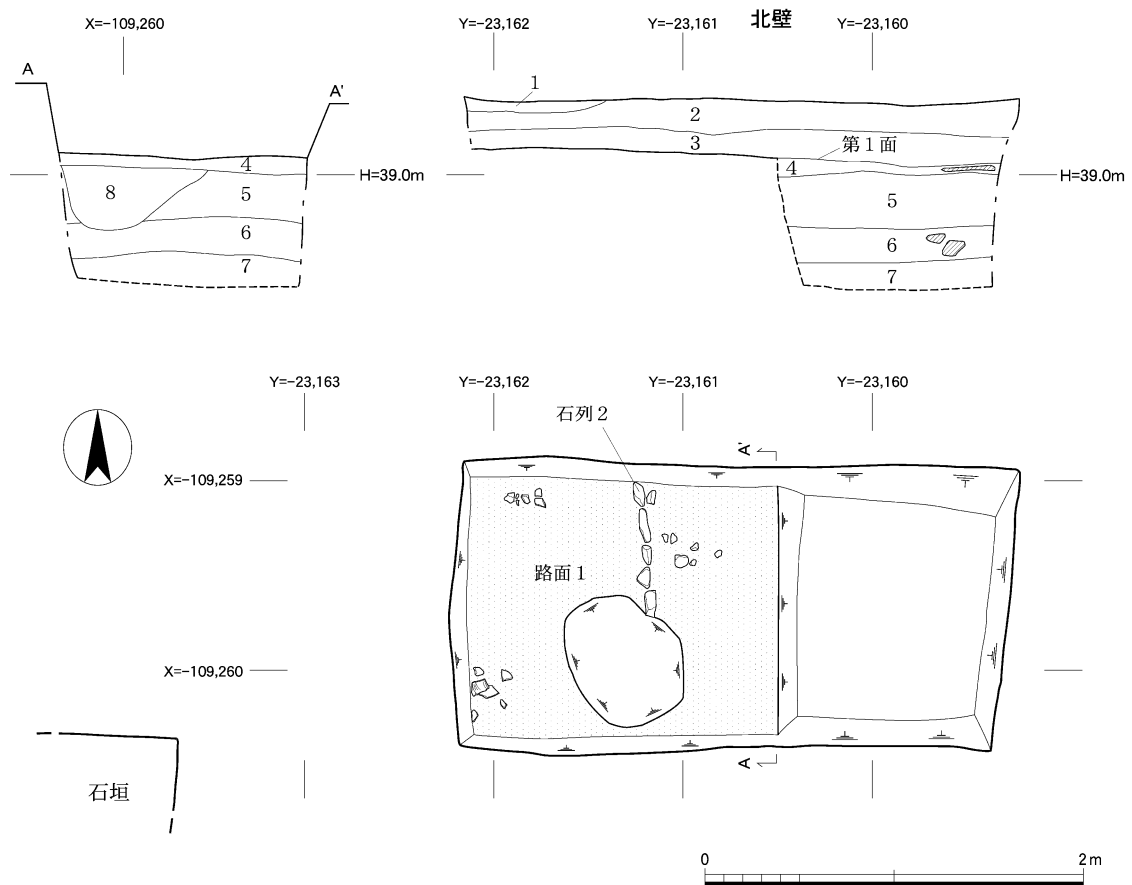
厚さ 15 ～ 25 cmの路面砂利・庭造成土などの下に厚さ約 15 cmの近・現代の盛土があり、その下に厚さ約 5 cmの褐色砂礫層があった。この層の上面は礫を密に敷き詰め強く締まった面となっている。その下層は 3 層に分けることのできる礫を多く含む砂泥層となる。

遺構

2 面に分けて調査を行った。当初の発掘調査区 1.5 m× 1.5 mの範囲で近・現代盛土層を掘り下げ、褐色砂礫層上面に礫を密に敷き詰め強く締めた面（路面 1）を検出した。この礫面は西門からの通路、または、石垣回りに取り付く路面と考えることができる。この面には長径約 15 cm大の石が南北に並べられており（石列 2）、通路の外縁をふちどる石列と考えられた。これらの遺

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
江戸時代中期 ～後期	整地層	
江戸時代後期	路面 1 ・石列 2	
幕末	瓦溜り 3	



- 1 10YR4/4褐色砂泥に10YR5/6黄褐色砂が多量に混じる (近・現代盛土)
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥 (近・現代盛土)
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 (近代盛土)
- 4 10YR4/4褐色砂礫、φ 2～5 cmの礫を全体に含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、φ 2～5 cmの砂礫を全体に含む
- 6 10YR3/4暗褐色砂泥、φ 3～10cmの礫を全体に含む
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥、φ 2～5 cmの砂礫を全体に含む
- 8 10YR3/2黒褐色砂泥、φ 2～5 cmの砂礫と拳大の石を全体に含む

図11 1区遺構実測図 (1:40)

構については、文化財保護課から、この石列を含む路面を保存するよう指導を受けた。このため、調査区を1.3 m東へ拡張して、この部分で調査を進めることとなった。拡張区においても路面の拡がり認められ、この面を第1面として記録作業を行った。この路面からは江戸時代後期から幕末の陶磁器が少量出土した。この拡張区下層では礫を多く含む砂泥層を3層確認した。これらの層は江戸時代前期の整地層と考えられ、寛永期の本丸造成時に何段階かにわたって行われたと考えられる。工事予定掘削深度の1 mまで掘り下げた面を第2面とした。第2面は暗褐色砂泥(7)の整地層中にとどまり、遺構は確認できなかった。なお、保存する路面・石列には砂を入れた土嚢を敷き詰め養生し、遺構を保護した。

(3) 2区の調査 (図12)

概要

2区は防犯カメラ設置予定箇所の調査区である。既存の電気配管を避けて南北1 m・東西1 m

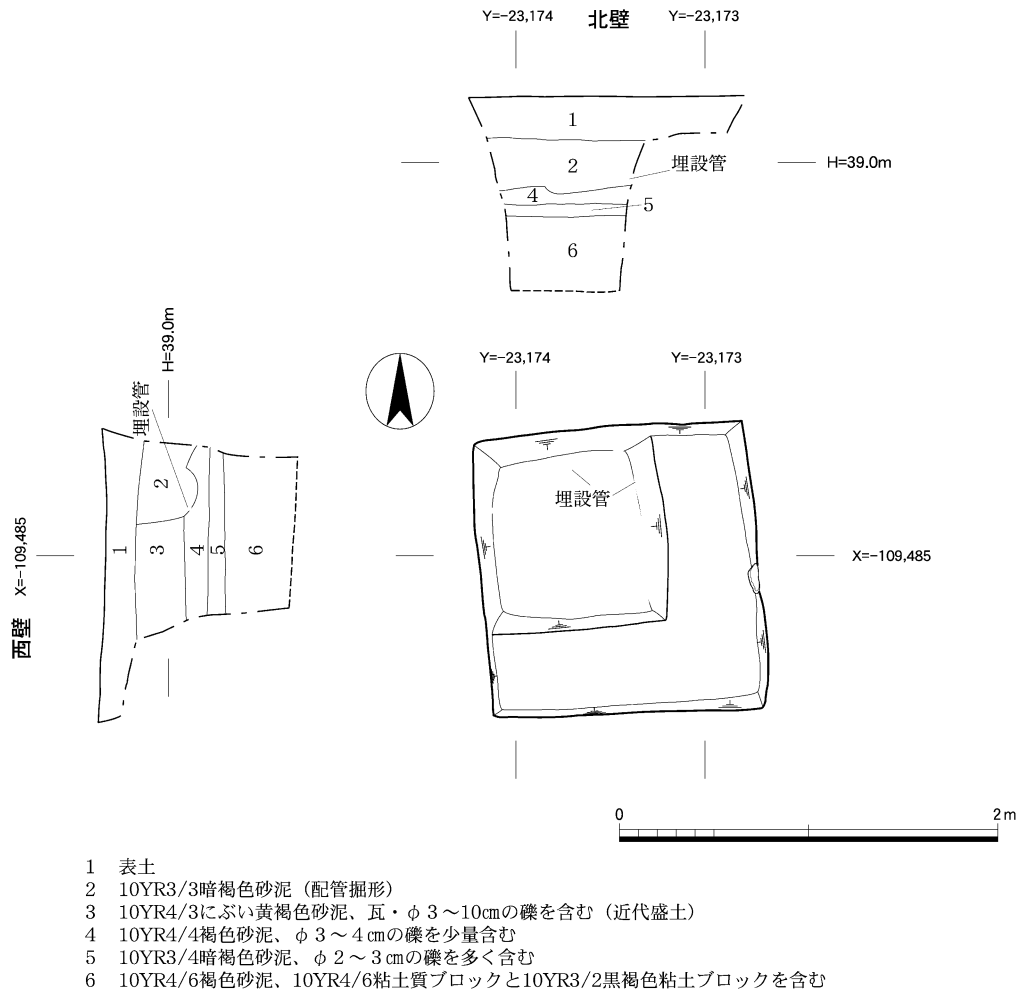


図12 2区遺構実測図（1：40）

の方形で設定したが、調査中に遺構の拡がりを確認するため、南側および東側に約0.3m拡張した。
 層位

約50cm厚さの表土・近代盛土の下ににぶい黄褐色砂泥（3）、褐色砂泥（4）、暗褐色砂泥（5）、褐色砂泥（6）の4層に分けることのできる砂泥層が堆積する。

遺構

各土層の上面で遺構検出を行ったが、電気配管により攪乱されていたこともあり、各層が整地層であることを確認したにとどまった。掘削予定深度の1mまで掘り下げたが江戸時代の整地層中にとどまり、顕著な遺構は検出していない。ここからは江戸時代の瓦が少量出土した。

(4) 3区の調査（図13）

概要

3区は防犯カメラ設置予定箇所の調査区である。庭石と庭木の間隙に南北1.5m・東西1.3mの方形で設定した。調査は2面に分けて実施し、第1面で幕末の遺構、第2面で江戸時代前期から後期の遺構を検出した。

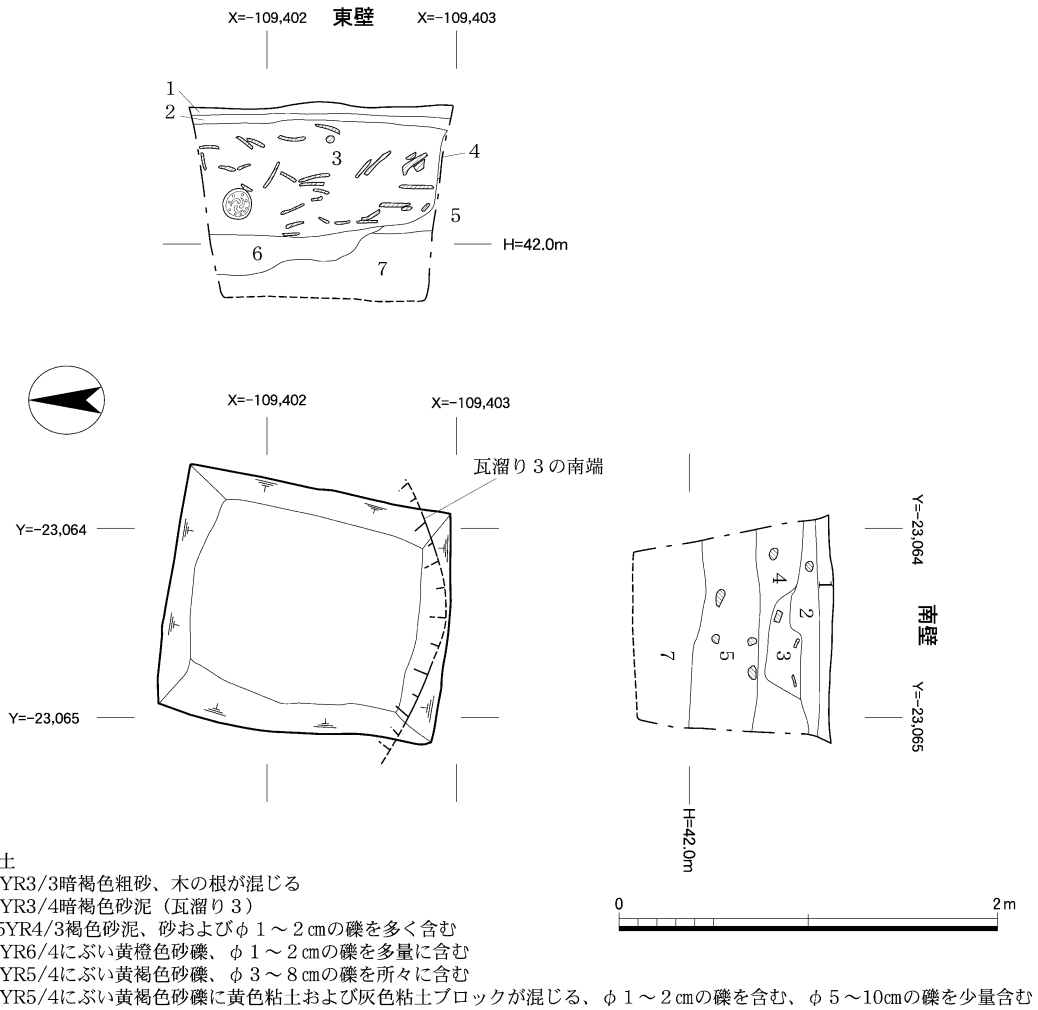


図13 3区遺構実測図（1：40）

層位

厚さ8～15cmの庭の造成土の直下で、図13のとおり瓦が密に詰まった層（3）があった。その下層には褐色砂泥層（4）、にぶい黄橙色砂礫層（5）、にぶい黄褐色砂礫層（6）、にぶい黄褐色砂礫に粘土ブロックの混じる層（7）があり、14次調査W区で検出された江戸時代前期の盛土と同様の層序であった。

遺構

2面に分けて調査を行った。第1面は現地表から8～15cmの庭の造成土を除去した面で、瓦溜り層を検出した。この層は厚さ55～60cmあり、灰白色の漆喰の塊が混ざる。軒丸瓦・軒平瓦・道具瓦など大量の瓦が出土したが、焼瓦は含まれていなかった。断面観察から、調査区の南壁際がこの層の南際となることが判明、調査区が大規模な瓦溜りの南端になることがわかり、この層を瓦溜り3とした。その下層に重なる砂礫層は、本丸造営に伴ってかさ上げした盛土と考えられる。工事予定掘削深度の1mまで掘り下げた面を第2面としてにぶい黄褐色砂礫に粘土ブロックの混じる層（7）まで掘り下げたが、江戸時代前期の盛土中にとどまり、遺構は確認できなかった。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

全調査区で合わせて整理用コンテナに4箱の遺物が出土した。出土遺物の種類には土器類・瓦類・漆喰塊などがある。ほとんどを江戸時代の瓦が占め、その他の種類は少ない。出土した瓦には、江戸時代の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦をはじめ、菊丸瓦などの道具瓦がある。

(2) 土器類

土器類には1区および2区の近・現代の盛土から、施釉陶器・染付の小破片が少量出土している。すべて極小片のため図示していない。

(3) 瓦類

瓦類には菊丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・輪違瓦・その他の道具瓦がある。中世の瓦1点以外は全て江戸時代のものである。

中世の瓦は平瓦小片で、タタキ目および布目があった。1区のあげ土より発見した。新しい時期の遺構・包含層に混入していたものとみられる。

菊丸瓦（図14、図版3 1～7）

菊丸瓦は、棟込瓦の一種で、菊花文の小型丸瓦当に細長い体部を接合する。すべて3区瓦溜り3から出土した。

1・2は同範もしくは同文の間弁を配する八弁花文である。弁端は丸みをもつ。調整は、瓦当裏面は指オサエの後ナデ、周縁部を円周方向にナデ。接合部はナデ。外周は横方向のナデで体部左側縁のナデに連続している。凸面はタテ方向のケズリである。

3は間弁を配する弁数不明の花文である。弁端は丸みをもつ。調整は、瓦当部裏面の接合部はナデ、凸面はタテ方向にケズリの後ナデである。

4・5は同範もしくは同文の間弁を配する十二弁花文である。弁端は尖る。調整は、瓦当部裏面は指オサエの後ナデ、周縁部を円周方向にナデ。接合部はナデ。外周下半は横方向のナデで、さし部右側縁ナデに連続している。凸面は縦方向のケズリである。

6は単弁の十二弁花文で、花弁は接する。調整は、瓦当部裏面は指オサエの後ナデ、周縁部を

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
江戸時代中期～後期	施釉陶器、染付、瓦類、漆喰塊	4箱	軒丸瓦5点、軒平瓦7点、菊丸瓦7点、輪違瓦1点、漆喰塊一括	3箱	0箱
合計		4箱	21点（1箱）	3箱	0箱

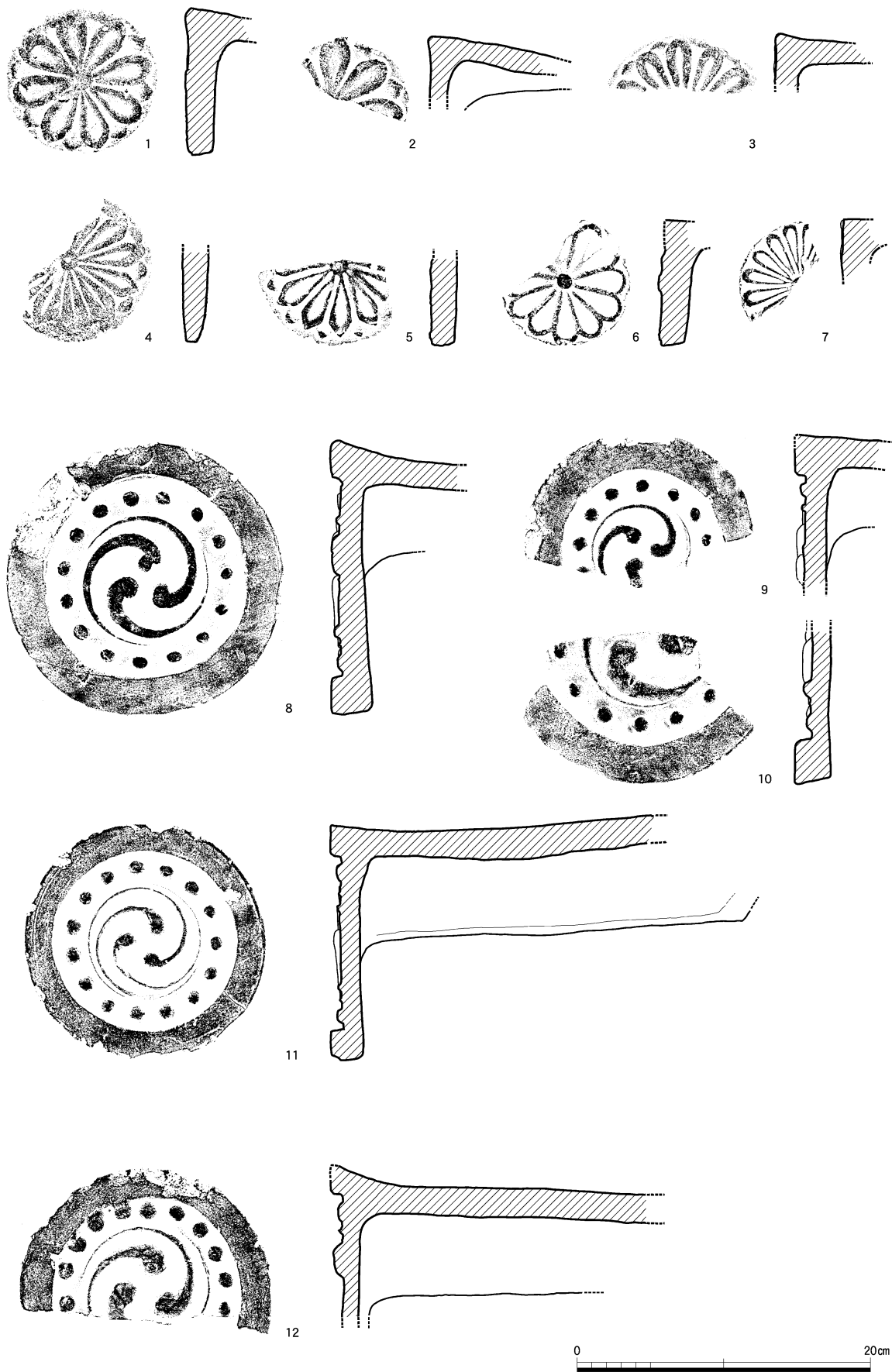


图 14 菊丸瓦·軒丸瓦拓影·实测图 (1 : 4)

円周方向にナデ。接合部ナデ。外周は横方向のナデ。凸面は縦方向にケズリである。瓦当面全面に剥離剤の雲母が多く付着する。

7は単弁の十五弁と思われる花文で、弁端は丸みを持つ。花卉は細く、互いに接しない。調整は、外周は横方向のナデ。接合部はナデ。凸面はタテケズリである。瓦当面全面に雲母が多く付着する

軒丸瓦（図 14、図版 3 8～12）

軒丸瓦の瓦当文様はすべて巴文である。軒丸瓦には、大型のもの（8）が1点あった。すべて3区瓦溜り3から出土した。

8は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を15個配する。調整は、瓦当面周縁内側を面取り。瓦当部裏面はナデ、接合部から周縁部は円周方向にナデである。外周は横方向のナデ。凸面は縦方向のケズリ。凹面は、鉄線による切り離し痕と布目が残る（いわゆるコビキB手法⁶⁾）。瓦当面全面に雲母が多く付着する。

9は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を配する。調整は、瓦当面周縁内側を面取り。瓦当部裏面はナデ、接合部ナデ。外周は横方向のナデ。凸面は縦方向のケズリ。瓦当面全面に雲母が多く付着する。

10は右巻きの三巴文で、巴尾部同志が接する。周囲には珠文を配する。調整は、瓦当面周縁内側を面取り。瓦当部裏面はナデ、周縁部は円周方向にナデ。外周は横方向のナデ。瓦当面全面に雲母が多く付着する。

11は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を15個配する。調整は、瓦当部裏面はナデ、接合部から周縁部は円周方向にナデ。外周は横方向のナデ。凸面は縦方向にナデである。凹面は、鉄線による切り離し痕と布目が明瞭に残る。側縁はヘラケズリである。

12は右巻きの三巴文で、周囲には珠文を密に配する。珠文の一部は周縁内側に接する。調整は、瓦当面周縁内側を面取り。瓦当部裏面はナデ、接合部ナデ。凸面は縦方向のナデ、凹面は鉄線による切り離し痕と布目が明瞭に残る。

軒平瓦（図 15、図版 3 13～19）

軒平瓦の瓦当文様はすべて唐草文で、瓦当部分の接合技法はすべて貼り付けである。13～17は3区瓦溜り3、18・19は2区からの出土である。

13は簡略化した唐草文である。調整は瓦当部裏面、外周とも横方向のナデ、側縁は縦方向のナデ。凹面は丁寧なナデ、凸面は側縁近くは縦方向のナデで他は不調整である。瓦当上端は面取りし平滑に仕上げる。瓦当面全面に雲母が多く付着する。

14は文様の詳細は不明であるが13と同範もしくは同文とみられる。調整は瓦当部裏面、外周とも横方向のナデ、側縁もナデ。凸面は側縁近くのみ縦方向のナデで他は不調整である。凹面丁寧なナデを施す。瓦当上端の角は面取りし平滑に仕上げる。瓦当面に雲母が多く付着する。

15は文様の詳細は不明であるが、唐草の巻き込みが強い。調整は瓦当部裏面、外周とも横方向のナデ、側縁、凹面もナデ。凸面は不調整である。瓦当上端の角は面取状のケズリを施す。瓦当

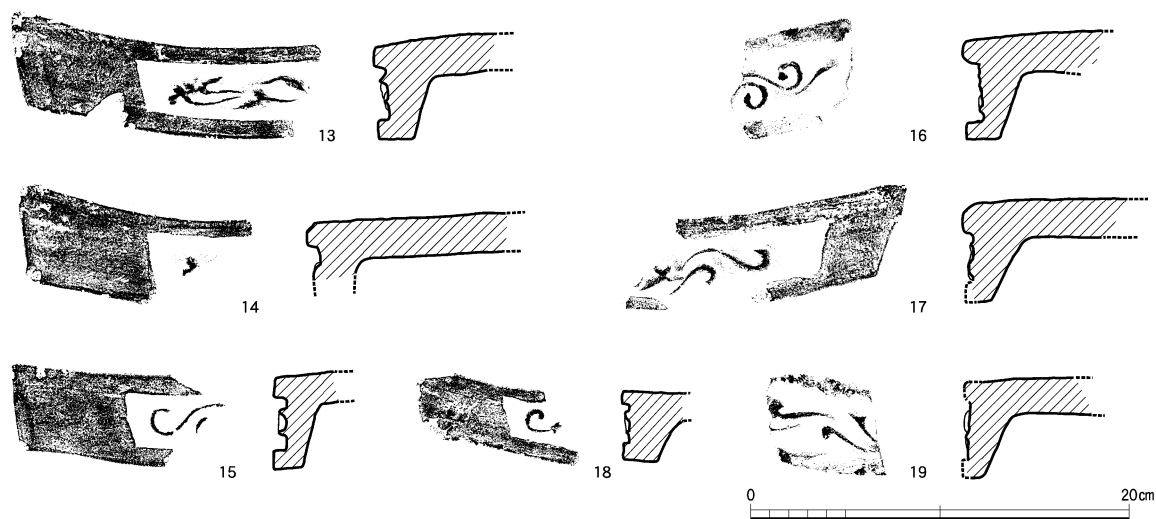


図15 軒平瓦拓影・実測図（1：4）

面に雲母が多く付着する。

16は文様の詳細は不明であるが、唐草の巻き込みが強い。調整は瓦当部裏面、外周とも横方向のナデ、凹面はナデ。凸面は不調整である。瓦当上端の角は面取りし平滑に仕上げる。瓦当面に雲母が多く付着する。

17は簡略化した唐草文である。中心に三つ葉を飾る。三つ葉の先は3つに分かれる。調整は瓦当部裏面、外周ともは横方向のナデ、側縁、凹面もナデ。凸面は縦方向のナデ。瓦当上端の角は面取りする。

18は文様の詳細は不明であるが、唐草の巻き込みが強い。調整は瓦当部裏面、外周とも横方向のナデ、側縁、凹部外面もナデである

19は簡略化した唐草文で、中心に三つ葉を飾る。調整は瓦当部裏面は横方向のナデ。凹面は丁寧なナデで、凸面は不調整である。

輪違瓦（図16、図版3 20）

輪違瓦は丸瓦と比較して薄手のものが多く、平面形が台形をとることに大きな特徴がある。3区瓦溜り3から1点出土した。

20は縦方向に屈曲気味で丸みをもつ。調整は凸面はナデの後、狭端面側を横方向にナデ。側縁側に面取り状のケズリを施す。凹面は、鉄線による切り離し痕と布目が残る。側縁はケズリである。広端面・狭端面は横方向のナデである。全面に雲母が付着する。

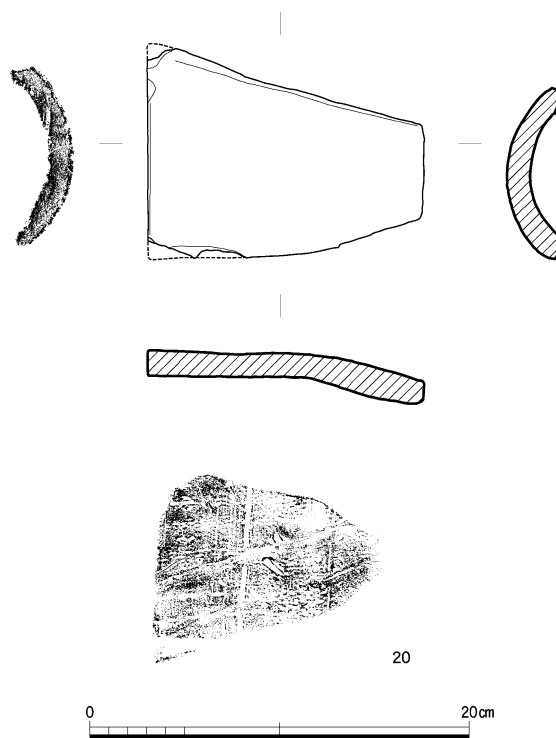


図16 輪違瓦拓影・実測図（1：4）



図 17 漆喰塊

(4) その他の遺物

漆喰塊 (図 17)

3区瓦溜り3より漆喰塊が出土した。7.5YR 8/1 灰白色を呈し、小さいものでは径3 cmから大きいものでは拳大の大きさがある。端面がなく厚みがあること、荒土の付着がないことから、実際に壁土として使用したものではなく、原材料と考えられる。風化が進んでいないことから、

埋まってからそれほど時間がたっていないことを示すのではないかと考えられる。

5. まとめ

今回の調査区は寛永の大改築により西へ拡張された地区にあたる。すべての調査区において、掘削深度が1 mまでと制限されていたため、いずれの調査区でも江戸時代前期（寛永期）の整地層より上層にとどまった。したがって、検出した遺構はすべて、寛永期以降のものである。

1区で検出した路面は、通用門として使われていた西門から米蔵へ続く通路、または、石垣回りに取り付く路面と考えられる。この面は近・現代盛土の直下で検出したことと出土遺物から、江戸時代後期から幕末頃のものと考えられる。

2区では、近・現代盛土の下層で整地層と考えられる砂礫層を検出したのみである。当地には、寛永期の絵図に番衆小屋が描かれているが、その痕跡を認めることはできなかった。

3区では、本丸造営に伴ってかさ上げた盛土層に掘り込まれた大規模な瓦溜りを検出し、大量の瓦が出土した。天守閣・櫓・もしくは本丸御殿に使用されていたものと考えられる。本丸は天明の大火で焼失したことが伝えられているが、出土した瓦には火を受けた痕跡がなく、この瓦溜りの成立時期については、それよりも新しいものと考えられ、家茂入城時の仮御殿造作に伴う遺構と推測できる。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年
- 2) 谷直樹編『大工頭中井家建築指図集 中井家所蔵本』思文閣出版 2003年
- 3) 『史跡旧二条離宮（二条城）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-15（財）京都市埋蔵文化財研究所 2010年
- 4) 『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5) 註3)に同じ
- 6) 『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1984年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	しせききゆうにじょうりきゆう (にじょうじょう)							
書名	史跡旧二条離宮 (二条城)							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-12							
編著者名	モンペティ恭代							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせききゆうにじょうりきゆう 史跡旧二条離宮 (にじょうじょう)	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 にじょうどおりほりかわにしている 二条通堀川西入	26100	A453	35度 00分 54秒	135度 44分 46秒	2010年9月 6日～2010 年9月17日	8.4m ²	防災・防犯 設備工事
へいあんきょうあと 平安京跡	にじょうじょうちやう 二条城町541 ばんち にじょうじょう 番地 二条城		1					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡旧二条離宮 (二条城)	史跡	江戸時代	路面、石列	瓦、施釉陶器、磁器				
平安京跡	都城跡	幕末	瓦溜り	瓦、漆喰塊				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-12

史跡旧二条離宮（二条城）

発行日 2010年11月30日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961